

令和 5 年 6 月 25 日現在

機関番号：34305

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02403

研究課題名（和文）『はだしのゲン』の英訳成立とアメリカにおけるその受容の研究

研究課題名（英文）A Study of the English Translation of Barefoot Gen and Its Reception in the United States

研究代表者

莊中 孝之（Shonaka, Takayuki）

京都女子大学・文学部・教授

研究者番号：70390101

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：アメリカで様々な個人や団体がこのマンガを広めようとしたり、教育機関において使用したりしている例は認められたものの、全体としてそれらの活動は非常に限られた散発的なものであった。またこの作品はアメリカ人にとって加害者としての罪悪感を引き起こすものであり、容易には受け入れがたいと思われる。さらにそこで描かれた多くの暴力的な描写は、平和を訴えるものであるはずの本作品の大きな矛盾である。その他、作中に見られる男性中心的な価値観や固定的なジェンダーロールなどもこの作品が現代において広く読まれることを難しくしている。近年さらにこの作品は過去のものになりつつあると認めざるをえない。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現地調査の結果、『はだしのゲン』は日本で考えられているほどアメリカでは受け入れられていないことがわかった。その受容を困難にしているいくつかの要因は従来から指摘されていることであったが、教育現場での実際の教師の声を聞いたり、この作品を広めようとした人たちの苦勞を知ったりすることで、より具体的にその実情を理解することができた。アメリカでのこの作品の受容とそれを難しくしている理由を知ることは、唯一の被爆国に生きる我々が、今後どのように戦争や原爆の悲惨さを世界に発信し、後世に伝えていくべきかというヒントを与えてくれるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：Although there have been some examples of various individuals and groups trying to disseminate the manga or using it in educational institutions in the United States, their activities were very localized and sporadic as a whole. It also proves that Americans feel guilty as perpetrators when they read this manga, which prevents the work from being accepted. Furthermore, many of the violent scenes depicted there are major contradictions in this work, which is supposed to appeal for peace. Other features such as male-centric values and fixed gender roles seen in the work make it difficult for the work to be widely read in modern times. We have to admit that in recent years this work has become even more of a thing of the past.

研究分野：英文学

キーワード：『はだしのゲン』 原爆 マンガ アメリカ 受容

1. 研究開始当初の背景

原爆を描いた漫画として知られる中沢啓治の『はだしのゲン』(1973-85年、以下『ゲン』と略記)は、2021年10月の時点において世界26ヶ国の言語に翻訳されている。近年の英米圏におけるその受容についてはロジャー・サビンの包括的な研究(2006)がある。これは2000年代初頭までの英米圏での動向を概括する、綿密な調査と鋭利な分析に裏打ちされた優れたものである。しかし日本以外の国における、一般の読者や教育現場での生の声を拾うような研究は見当たらない。

2. 研究の目的

そこでサビンの研究から10年以上経過した2010年代後半において、よりローカルで具体的な受容を調べることで見えてくることでもあるのではないだろうかという問題意識のもと、本課題に取り組んだ。実際にどこで、どれほど、どのような人たちに、どのように読まれているのだろうか。たとえば太平洋戦争の発端となった、真珠湾攻撃が行われたハワイではどうだろうか。日系人を含め数多くの民族が共存するこの島は、原爆や日本の戦争責任の問題を考えるうえで、非常に複雑で興味深い場所である。そこで『ゲン』はどのように受け止められているのだろうか、という点を明らかにすべく現地調査を行った。

3. 研究の方法

まずハワイでの調査に先立ち、日本で『ゲン』を英語に翻訳した金沢の市民グループ、「プロジェクト・ゲン」の代表、浅妻南海江氏を取材した。そこで具体的に翻訳の過程や苦労した点などを聞き取り、さらに後日、実際に翻訳されたものと原作との綿密なテキストの比較分析を行った。

その後ハワイに渡り、ホノルルのパロロ本願寺、ハワイ大学マノア校アジア研究学部、プナホウスクール、『ハワイ報知』や*Hawaii Pacific Press*などの現地新聞、図書館やコミック専門店などで現地調査や関係者へのインタビューを行った。帰国後にハワイで『ゲン』の広報活動を行っていたことのある人物にも話を聞いた。

4. 研究成果

日本で『ゲン』を英語に翻訳した金沢の市民グループ、「プロジェクト・ゲン」の代表、浅妻南海江氏に取材をすることで、以下の翻訳の過程が明らかになり、さらにその後の翻訳と原作の比較を通じて次のような問題点が浮かび上がった。

同グループはもともと、平和活動をしていた大嶋賢洋氏が1977年に数名の仲間と立ち上げたもので、1978年には『はだしのゲン』第1巻を翻訳出版している。その後初代グループは4巻まで刊行した。そしてチェルノブイリ原発事故で被災したウクライナ人女性と、金沢の小学生との文通の翻訳を担当していた浅妻氏が原爆について伝えたいと考え、『ゲン』をロシア語に訳すために「プロジェクト・ゲン ロシア班」の名で活動を始め、2001年に7年がかりでロシア語版を完成させた。2代目代表となった浅妻氏はその後、完訳版がなかった英語版全10巻を、約10年かけて2009年に出版している。英語版はメンバーの一人で、現代表の西多喜代子氏を中心に、数名の小グループで作業が進められた。メンバー間で分担して、ある程度訳したところで同グループ創立当初からの協力者、アメリカ人のアラン・グリーンズン氏に英文校正をしてもらうというように進められたそうである。そのあとはスキャナーで原作を読み取り、縦書きの日本語部分を消して、そこに横書きで英訳を書き込むという作業が待っているが、そこには大変な苦労があったようである。具体的には絵に書き込まれた擬音語や擬態語、背景の処理、スペース、縦書きと横書きの関係、読む方向、反転させた場合に起こる問題、方言等について、聞き取りとテキストの分析によって考察を行った。

このような苦労を経て全10巻が英訳された『ゲン』は、島根県で水産会社を営むある篤志家が出資し、2006年から2007年にかけて全米約3000の公立図書館に、最初の1、2巻をセットにしてプロジェクト・ゲンから寄贈された。その後同グループには全米各地からたくさんの礼状が届いている。そのほとんどは受領した図書館からの謝意を示す事務的な文書やほんの短いものであるが、なかには数頁にもわたるかなり長文の感想もあった。それらは皆、登場人物たちの過酷な運命を憐れみ、原爆の恐ろしさに驚いたというようなものである。たとえば2013年に同グループに届いた14歳のある少女からの手紙では、図書館で偶然この本を見つけ、その後残りの

巻を注文して、2、3カ月かけて全10巻を読んだという。彼女はそれぞれの巻で泣き、笑い、そして最後には怒りと悲しみと希望が入り混じったものを感じたという。そして末尾に「私は、原爆について今自分がどう感じているか、しっかりと理解しました。そして、その問題が話題になるとき、私はもう臆病で、恥ずかしがり屋ではありません。わたしたちは非難しあうのをやめなければいけません。アメリカは原爆を落とすべきではなかったし、日本はハワイを攻撃すべきではなかったのです。・・・日本とアメリカは両方とも罪を犯したのです」と記している。こうしてアメリカに蒔かれた『ゲン』の種は、たとえ限定されたものであったとしても、確実に芽吹いているのである。

次にハワイにおける『ゲン』の受容を調査すべく現地へ渡った。ハワイではホノルルのパロロ本願寺、ハワイ大学マノア校アジア研究学部、プナホウスクール、『ハワイ報知』や *Hawaii Pacific Press* などの現地新聞、図書館やコミック専門店などで現地調査や関係者へのインタビューを行った。まずパロロ本願寺では寺院の貸文庫の一部としてこのマンガが、あるコミュニティー内で一定の役割を果たしていることを確認できた。またハワイ大学では Lonny Carlile 博士と面談した。博士によれば大学で日本や東南アジアについて学ぶ学生であれば、その存在は知っているという。ハワイ大学で最大の図書館、ハミルトン・ライブラリーにも『ゲン』は日本語の原作を含め、英訳版、その他の資料や研究書とともに配架されている。州立大学の図書館は学生だけでなく地域の住民にも開かれているので、ここでは比較的容易に誰もが手に届く範囲に『ゲン』は置かれているのである。プナホウスクールでは日本語を教えているピーターソン・ひろみ、エイディ淳子両氏と面談した。両氏とも授業で『ゲン』を使ったことはあるが、原爆の悲惨さを伝えるためにその投下前後のほんの一部を使用しただけで、全体としては扱いにくいという印象を持っているという。それは全編に横溢する、原爆を投下した国アメリカに対する呪詛にも似た言葉ゆえにだという。ハワイでは特に様々な民族的バックグラウンドを持つ人が多いため、学校でも特定の人種や民族を非難したりすることがないように、細心の注意を払わなければならないという。次にハワイのメディア関係取材した。まず1912年に創刊され、現在ハワイ唯一の日刊日本語新聞である『ハワイ報知』の編集局長、金泉典義氏と面談した。氏によればこれまで同紙で『ゲン』が取り上げられたことはないし、ハワイの日系社会でこのマンガについて聞いたこともないという。さらに1977年に創刊された月刊邦字紙である、*Hawaii Pacific Press* 社長の仲嶺和男氏にも面談したが、沖縄出身の同氏はこのマンガ自体を知らないし、日系社会でこの作品が話題になったこともないという。このようにハワイの日系社会全体では、『ゲン』はほとんど認知されていないことがわかった。日本でも『ゲン』はかつての存在感を失いつつあるように思われるが、それでもまだ日本社会全体ではよく知られた原爆マンガと言えるだろう。以前ほどではないとしても、日本ではまだ平和教育に利用され、学校の図書館に配架されていることも多いのである。しかしここハワイでは原爆について触れられることは少なく、学校に置かれていることもほとんどないのである。

さらにハワイ州最大のショッピングモール、アラモアナ・センター内にあるバーズ・アンド・ノーブル・ブックスで『ゲン』を探した。ここは新刊書店としては同州最大であり、日本のマンガコーナーもある。しかし最近英語に翻訳された日本のマンガはかなり並んでいるが、『ゲン』のような古いものは、当然ながら見つけることができなかった。最後にホノルルのコミック専門店 *Gecko Books & Comics* へ向かった。2020年10月に閉店したこの店は、それまでは同種の店舗としてはハワイで最大級のものであった。薄暗い店内には所狭しとコミックやマンガ、その他のグッズが置かれているが、ここでようやく『アキラ』や『ジョジョの奇妙な冒険』、『風の谷のナウシカ』の英訳の間に『ゲン』を見つけたことができた。店長に話を聞くと、学校で日本について学んでいるのであろう学生が時々買っていくという。彼自身もこれは大事な作品だと考えており、売れるとすぐに入荷するようにしているという。

帰国後にハワイ州公認の日本語ラジオ放送局、KZ00 でアナウンサーをしていた佐野京子氏と面談した。佐野氏は以前、『ゲン』をハワイの学校や図書館に送る活動を行っていたことがある。氏は娘の出産を機に、アメリカが戦争を繰り返していることや、原爆の悲惨さが日本ほどには伝わっていないことが気になり始めたという。またKZ00ラジオで働きだして、広島や沖縄にルーツを持ち、原爆や沖縄戦、空襲、移民などの戦争体験を持つ多くのリスナーたちと出会ったこともきっかけであったらしい。そこで自分に何ができると考えた佐野氏は、10歳のころに『ゲン』を読んで強烈な印象を受けたことを思い出し、2009年に『ゲン』の英語版 *Barefoot Gen* がアメリカの出版社 *Last Gasp* から全巻出版された際に20セットを購入し、この活動を始めた。しかしその時は、前述のプナホウスクールと彼女の娘が通っていた高校を含め、5校にしか受け入れてもらえなかったという。その理由として考えられるのは、まずマンガであるということだと佐野氏は言う。寄贈するために見本を持っていても、大抵は一瞥しただけで断られたそうである。アメリカではマンガは子供向けの娯楽であるという考えが強く、教育の現場にはそぐわないと判断されてしまうということだろう。またたとえ頁を開いたとしても、暴力的なシーンが目についてしまい、それで不適切と断定されてしまう可能性もある。さらに全編にわたって見られる原爆を投下した国に対する強い恨みの感情も、アメリカの学校で受け入れるには抵抗があるだろう。断られる際の常套句が「マンガはダメ」「政治的なものは受け入れられません」というものであったという。またさらに戦中・戦後の動乱期を舞台にしたこの作品では、古い価値観がそのまま描かれている。家庭ではしつけのために親が子を殴り、軍隊では上官が規律のために下官を殴り、学校では教育のため教師が生徒を殴る。こうした当時としては一般的であった家庭内

や軍隊、教育現場での暴力や体罰は、日本でも現在はまったく容認しがたいものである。また男性が主導し、女性が付き従うような、男性中心で男尊女卑の固定的ジェンダーロールが当然のこととして描かれるこの作品は、今や日本ですら古い価値観に基づいていると受け止められる。ましてやこうした暴力や男女差別といった問題に特に敏感なアメリカ社会では、到底受け入れがたいものと考えられてしまうのである。

これらの調査結果を踏まえて、日本や日系人との関係においては特別な場所とも言えるハワイにおいて、『ゲン』はいかなる存在と考えるべきであろうか。『週刊少年ジャンプ』にその第1話が1973年に掲載されて以来、日本共産党系の論壇誌『文化評論』や日教組の機関誌『教育評論』などに次々と発表媒体を変えながら、1985年によく完結したこの作品を、浅妻氏や西多氏らの市民グループがさらに10年近くかけて英訳した。そしてある篤志家の助けを借りて、その英訳が全米各地に届けられる。そこで確実にこの作品を手にとって感動した読者もいたわけであるが、ハワイで『ゲン』を知る者は残念ながら少ないと言わざるを得ない。今回は特にハワイの日系人社会におけるその受容を中心に調査を進めたが、意外なほどに『ゲン』の存在は知られていなかった。現地に住む多くの日系人が、この作品の名前すら聞いたことがないと語るのを聞いて、正直なところ驚きを禁じ得なかった。しかしパロロ本願寺のように信徒に『ゲン』を貸し出していたり、大学の図書館や専門書店にこの作品が置かれていたりするのも事実である。またたとえわずかであっても、現地の学校でこの漫画が教材として使われていることも注目すべきであるし、それら教育機関に受け入れてもらおうと奔走した人物がいたことは、記憶しておいてもよいだろう。なによりも『はだしのゲン』という作品の翻訳は、英語のみならずそのほとんどが、それを読んで強く心を打たれた人たちのボランティア的活動によってなされている。確かに『ゲン』はすでに「古い」漫画であり、そこでは時代に合わなくなっている価値観や描写も多い。しかしこの作品の持つ本質的な力や理念は、時間や場所を越えて伝播し、今後も様々なところで、たとえ小さくても強烈な印象を残す花を咲かせていくに違いない。ただしこのマンガ自体の問題点や「古さ」も十分に認めたくえて、今後は戦争や原爆を扱った他の作品と共に、アメリカを含む日本以外の国でどのようにそれらを伝えていくかということ、より慎重に考えていかなければならないだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 莊中孝之	4. 巻 21
2. 論文標題 海を渡る『はだしのゲン』—その英語訳とハワイにおける受容	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 英語英米文学論輯（京都女子大学大学院文学研究科紀要）	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>「ヒロシマの証言 被爆者は語る」 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館所蔵の被爆者証言ビデオの英語への翻訳監修</p> <p>2017年 サーロー節子氏 2018年 陳賜兵氏 2019年 田中喜代子氏 2020年 木幡吉輝氏 2022年 伊藤美代子氏</p> <p>以上の証言ビデオを翻訳監修</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	長谷 邦彦 (Nagatani Kunihiko) (40387981)	京都外国語大学・国際言語平和研究所・客員研究員 (34302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------